中島敦「山月記」「木乃伊」ほか典拠考
―G・K・チェスタトンの影響をめぐって―

橋　本　正　志

はじめに

中島敦（1909～1942）の「山月記」は、英作家G・K・チェスタトン（1874～1936）の評論『Orthodoxy[①]』（1908）の影響を受けて成立している[②]。この「山月記」と執筆時期が近い〈過去帳[③]〉〈古譚[④]〉諸篇にも、チェスタトンの影響が認められるのではないだろうか。

たとえば自伝的小説「狼疾記」には、チェスタトンのエッセイなどに触れた旨が記されており、実際に蔵書目録[⑤]にある選集『Stories, Essays, & Poems[⑥]』(1935)収録の作品を繙読した可能性が指摘できる。また、1937年(昭12)末頃に成立した歌集「Miscellany[⑦]」の題名は、この選集に収録されたエッセイの出典書目『A Miscellany of Men』から採られたものと考えられる。

これまで中島作品とチェスタトンとの関わりに焦点をあてた研究はほとんど見あたらない。中島文学の特質を見極めていく上でも、今後重視されてしかるべきテーマであると思われる。

そこで小論では、チェスタトンの『Orthodoxy』『Stories, Essays, & Poems』と〈過去帳〉〈古譚〉（主に「山月記」「木乃伊」）を比較・検討しながら、中島作品におけるチェスタトンの影響について考察していきたい。

1．〈過去帳〉への影響――「狼疾記」

まず、中島の1936年（昭11）の「手帳」に、チェスタトンの著作名が列記されていることに着目したい。そこには『Orthodoxy』の他に、『The Poet and the Lunatics』（1929）、『Generally Speaking』（1928）、『The Outline of

Sanity』（1927）、『The Return of Don Quixote』（1927）の４冊の書名が記されており、遅くともこの年から中島にはチェスタトンに対する強い関心があったことが見てとれる。折しも雑誌『英語青年』誌上では、同年１月から８月にかけて、中島が東京帝国大学で学んだ英文学者・澤村寅二郎[8]の翻訳をはじめ、多くのチェスタトン関連の記事が掲載されており、またその年の６月にチェスタトンが歿したことも、中島が上記の著作に対して興味をもった背景にあったのではないだろうか。

中島の旧蔵書については、「生前古書店との売買が激しく」、「死後もかなりの紛失が考えられ、殊に昭和22年の水害時、破損棄却したものが多い[9]」との証言記録が残る一方で、手帳にメモされた書名の中には、ハックスレイの『The Gioconda Smile & Other Stories』（1932）のように、実際に蔵書として現存するものもあることから、手帳に記された書名は「書店に購入を依頼したときの控え[10]」と考えてよいと思われる。したがって、これら書籍名のいくつかは実際に入手･閲覧されていたと判断しても差し支えないだろう。

いずれにしても1936年前後にわたって、中島はチェスタトンに強い関心を抱いていたことは間違いない。「狼疾記」に登場する博物の教師・三造の読書遍歴が語られる場面で「チェスタアトンの楽天的エッセイ等」（下線引用者。以下同じ）が「弱々しい声々で彼を説得しようとした」とあることからも、それらは確かにその「曲りくねつた論理」により、自身を「幸福」なものとして「説得」させ得る内容であったと推察される。こうした三造の自己省察、すなわち「他人から教へられたり強ひられたりしたのでない・自分自身の・心から納得の行く・「実在に対する評価」が有ち度かつた」と吐露された思いの前提には、まずもって作者・中島のチェスタトンに対する強い関心があったことを確認しておきたい。

さて、三造は「漠然とした不安」から逃れるために、「心にもない説教を何度彼は自分に向つて言ひ聞かせたことだらう」と回想し、次のような「説教」を具体的に挙げている。「簡単なオプティミズムへの途を教へてやらう。天才と才無き者、健康者と虚弱者、富豪と貧民との差と雖も、生れて来た者と生を与へられざりし者との差には、比ぶべくもないではないか、といふ考

へ方はどうだ」云々」（「狼疾記」）と。こうした三造の「存在の不確かさ」にまつわる考察の内容は、次のチェスタトンの『Orthodoxy』の一節（IV. The Ethics of Elfland, p.116）とも関係しているのではないか。

> 偉人に「なりそこなった」偉人は多いというのもよく言われたことだった。しかし私には、どんな人間も「生まれそこなった」人間でありえたかもしれぬという事実のほうが、もっと手応えのある、もっと驚くべきことのように思えるのである。（「４　おとぎの国の倫理学」107頁。以下「4」と略す）

「狼疾記」と同じ〈過去帳〉からの一篇「かめれおん日記」の主人公「私」の言葉として、「世界は、ほんのスキッチの一ひねりで」「幸福な（？）世界ともなり得るし、又同じ一ひねりで、荒冷たる救ひのないものともなる」といった同様の認識が描かれていることからも、「実在に対する評価」を求める自意識が語られた場面には、明らかにチェスタトンの〈運命観〉の影響が指摘できよう。

次に、「狼疾記」の冒頭には「孟子」の一節「養其一指、而失其肩背、而不知也、則為狼疾人也」（「指一本惜しいばかりに、肩や背まで失って気がつかぬ、それを狼疾の人という[11]」）がエピグラムとして掲げられていることに着目してみたい。下に引くチェスタトンの『Orthodoxy』の一節（II. The Maniac, p.47）との関連がみてとれる。

> 面白いことに、現代の思想家の中には、懐疑派であると神秘派であるとを問わず、東洋的なあるシンボルを好んで使う者が少なくない。究極の虚無を象徴するシンボルである。永遠を象徴的に表現しようとする時、彼らは、ヘビが自分の尾を口にくわえている図を好んで使う。自分の腹を満たすために自分の尻尾を食らうとは、いかにも間尺にあわぬ食事と言うべきだが、このイメージには実に驚くべき皮肉がある。唯物論的宿命論者、東洋的ペシミスト、高慢ちきな見神論者、あるいは今日の高遠

な自然科学者たち〔中略〕の思い描く永遠の観念を表わすのには、自分の尻尾を食っているヘビのイメージはまさに打ってつけではないか。天国を追われた邪悪な動物が、さらに自分自身をさえ食い滅ぼしている図なのだから。(「２　脳病院からの出発」38頁。以下「2」と略す)

この「自分自身をさえ食い滅ぼしている図」は、「かめれおん日記」のエピグラム「蟲有蚘者。一身両口、争相齕也。遂相食、因自殺」(「韓非子」)とも酷似している。両者はよく似た内容であることから、この時期の中島の文学的発想や表現に少なからず影響を与えた一節だったのではなかろうか。また、以下に引く身体の部位に関する描写にも、チェスタトンの認識方法(Ⅶ. The Eternal Revolution, p.208)との共通性が指摘できる。「自分の父に就いて考へて見ても、あの眼とあの口と(その眼や口や鼻を他と切離して一つ一つ熟視する時、特に奇異の感に打たれるのだつたが)その他、あの通りの凡てを備へた一人の男が、何故自分の父であり、自分と此の男との間に近い関係がなければならなかつたのか、と愕然として、父の顔を見直すことが其の頃屢々あつた」(「狼疾記」)と身近な親族の顔の例を通じて考察した一節である。

そもそも興味ある顔立ちなるものは、目と鼻と口とが、お互いにきわめて複雑に関係しあって、ある特定の組み合わせを作りなすことにほかならぬからである。釣合い、調和は、単に自動的な傾向で生まれるはずがない。偶然の結果か、さもなければ何らかの意図の結果だ。(「７　永遠の革命」204頁。以下「7」と略す)

ここには、人間の認識の恣意性も含めて存在の不確かさに対する驚きなどが描かれている。漢学者として生きた伯父・中島端との繋がりをテーマにした初期作品「斗南先生」など、〈他者〉との関わりにおいて〈己とは何か〉とのモチーフを追究する中島文学を貫く問いが、チェスタトンの繙読からも得られた可能性が指摘できよう。

さらに、「狼疾記」の中で「犬」や「猫」といった動物と人間との「価値判断」の優劣について考察した部分についても、チェスタトンの原書における議論が活かされたのではないか。引用が続くが、以下に対比してみたい。

> 我々の価値判断の標準を絶対だと考へるのは、我々の自惚に過ぎないのではないか。〔中略〕我々がもし犬だの猫だの、さうした獣の・言葉やその他の表現法を理解する能力を有(も)つならば、〔中略〕彼等が我々よりも遥かに優れた叡智や思想を有つてゐることを見出さないとは限らないであらう。我々は、我々が人間だから、といふ簡単な理由で、人間の智慧を最高のものと自惚れてゐるだけのことではないのか。……（「狼疾記」）

> 自然は、猫は鼠よりもっと価値があるなどとは言わない。〔中略〕われわれが猫のほうが上だと考えるのは、要するにわれわれが〔中略〕生は死よりも上だという哲学を持っているからにすぎない。しかし、もしその鼠が、ドイツ流の厭世哲学に心酔しているとすればどうなるか。自分が猫に敗れたなどとはぜんぜん考えないだろう。〔中略〕それもこれも、すべては要するに鼠の世界観によって決まるのだ。（「7」186頁）

これら人間の「価値判断」や「世界観」を絶対的な「標準」として、「猫」などの動物よりも「上」だと考えること自体「自惚」に過ぎないとする趣旨は、「狼疾記」『Orthodoxy』ともほぼ同じである。あわせて「存在への疑惑」に関する考察部分も比較してみたい。

> 人間といふ奴は、時間とか、空間とか、数とか、さういつた観念の中でしか何事も考へられないやうに作られてゐるんだ。だから、さういふ形式を超えた事柄に就いては何も解らないやうに出来てゐるんだ。神とか、超自然とか、さうしたものの存在が（又、非存在が）理論的に証明できないのは其の為なんだ。お前の場合だつて、おんなじさ。お前の精神が

さういふ疑惑を抱くやうに出来てゐるから、さういふ疑惑を抱くんで、又、その解決が得られないやうに、お前の（つまり、人間の）精神が出来てゐるから、お前にはその解決が得られないんだ。（「狼疾記」）

唯物論的宇宙の牢獄は、けっして破ることのできぬからくりであった。なぜなら、われわれ自身もそのからくりの一部にすぎないものであったからだ。そこでは、われわれは何事もできないか、そうでなければ何事かをせざるをえない運命に縛られるかであった。神秘的な条件が存在し、制限が存在するという観念はことごとく姿を消していた。（「４」103頁）／唯物論者の宇宙は、地獄の責苦のようにどこまでもつづく平行線のごときものだった。〔中略〕彼らは、この宇宙は一個の物であると言う。なぜなら一個の法則が宇宙を支配していて、例外というものはないからであるという。（「4」104頁）

チェスタトンは、進化論のみに基づき「神秘的」な存在を否定する「唯物論者」の考え方を強く批判する文脈で語っているが、三造の認識にも、こうした「唯物論者」は「たった一つの思想の牢獄に閉じこめられている」（「４」102頁）とするチェスタトンの主張の影響が色濃く反映されていたのではないか。「あらゆる思想」を「自己の性情に向つて為したジャスティフィケイションに外ならぬ」とし、「人は己が性情の指さす所に従ふ」と捉える三造の思考もまた、原書の「I like to have some intellectual justification for my intuitions.」（IX. Authority and the Adventurer, p.263）との一節に拠ったものと考えている。

こうした「狼疾記」に披瀝された認識について、三造は自ら「楽天的」で「オプティミズム」に基づくものと解している一方で、「科学的宿命論」（「４」96頁）に懐疑的に向き合うチェスタトンの姿勢が、中島の筆致を通じて三造の認識方法に大きな影響を与えていた可能性は否定できない。とくに次に引く一節（IX, p.267）に示された「自然科学」との向き合い方は、「狼疾記」の三造の認識はもとより、後の「山月記」の主人公・李徴が語る運命観や〈虎〉への

変身理由にかかる自己分析の底流となって受け継がれていったのではないだろうか。

> 実際、人間と他の生物との間の隔絶は、あるいは自然科学的に説明できるかもしれないが、やはり隔絶であることには変わらない。（「９　権威と冒険」262頁）

２．〈古譚〉への影響（１）――「山月記」

さて、「狼疾記」の三造は「二つの生き方」について考察している。一つは「出世――名声地位を得ることを一生の目的」として「現在の一日一日の生活を犠牲にする生き方」であり、もう一つは「名声の獲得とか仕事の成就とかいふ事をまるで考へないで、一日一日の生活を、その時〳〵に充ち足りたもの」にする「うじ〳〵といぢけた活（い）き方」である。三造は「身体の弱さ」から「第二の生活」を選んだとし、その理由を次のように説明している。

> 今に至る迄治（なほ）りやうもない・彼の「臆病な自尊心」も亦、この途を選ばせたものの一つに違ひない。人中に出ることをひどく恥づかしがるくせに、自らを高しとする点では決して人後に落ちない彼の性癖が、才能の不足を他人の前にも自（みづか）らの前にも曝し出すかも知れない第一の生き方を自然に拒んだのでもあらう。（「狼疾記」）

ここには「山月記」李徴の自己分析の表現「臆病な自尊心」と同一で、後に「尊大な羞恥心」とも対になる表現がみえる。引用文中の「臆病な自尊心」には括弧が付されていることから、何らかの文献の表現を参照したものと考えられる。「狼疾記」にはもう一箇所、以下のような表現があり、やはり「山月記」にも用いられていることから、少なくとも「狼疾記」と「山月記」が構想・執筆された時期に、中島は何らかの共通する著作を読み、その影響感化がこれらの表記の背景にあったのではないか。

先週勤め先の学校で国漢の老教師が近作だといふ七言絶句を職員室の誰彼(だれかれ)に朗読して聞かせてゐた時、父祖伝来の儒家に育つた自分が冗談半分その韻をふんで咄嗟に酬いて見せた。〔中略〕老先生はすつかり驚いて、人の良ささうな大袈裟な身振で讃め上げて呉れたのだが、全く、その時、自分は――尊大なるべき俺の自尊心は――何と卑小な喜びにくすぐられたことだらう！（「狼疾記」）

これら「狼疾記」と「山月記」の「自尊心」に関わる表現は、冒険小説『宝島』（1883）で知られる英作家Ｒ・Ｌ・スティーヴンソン（1850～1894）を論じたチェスタトンの評伝『Robert Louis Stevenson[12]』の一節「‘ flinching pride ’ or ‘ quailing arrogance ’」（VI. THE STYLE OF STEVENSON, p.148）を典拠の一つとしていたと思われる。チェスタトンは、同書でスティーヴンソンの「欠点」として「self-conscious」（IX. THE PHILOSOPHY OF GESTURE, p.219）、すなわち「自意識過剰」（「９章　ジェスチャーの原理」157頁。以下「9」と略す）を挙げ、以下のように説明している。

人生においても文学においても、彼は基本的には良心的な人間だったと言える。そして、良心的(コンシエンシヤス)な人間は、おそらくまた意識的(コンシヤス)な人間であり、ときには自意識の強い人間でもあるだろう。〔中略〕彼の人生と作品には、どこを見ても、自分をなくすところはまったくなかった。（「9」158～159頁）

この主張に沿って、チェスタトンはスティーヴンソンの『難船掠奪者』を例に用いて、その文体の「無数の言葉のなかから一語一語がえりすぐられていて、それぞれの言葉が二十語にも匹敵する働きをしている」（「６章　スティーヴンソンの文体」104～

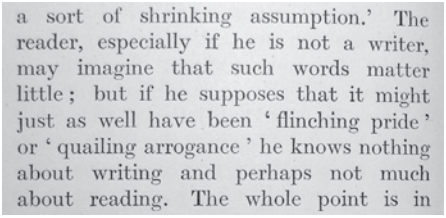
a sort of shrinking assumption.' The reader, especially if he is not a writer, may imagine that such words matter little; but if he supposes that it might just as well have been ‘ flinching pride ’ or ‘ quailing arrogance ’ he knows nothing about writing and perhaps not much about reading. The whole point is in

図1　VI. THE STYLE OF STEVENSON, p.148

105頁。以下「6」と略す）点を高く評価している。長くなるが、該当する部分を引用してみたい（図１参照）。

> ストーリーは、「この物語は、あわれな父の性格に端を発している」という言葉ではじまるが、その性格はひとつの段落にコンパクトに収められている。ジム・ピンカトンがはじめてこのストーリーに登場し、「誠意はあるが動揺した様子の」青年として描写されると、われわれは、物語の最後まで血の通った人間とともに歩み、その言葉のみならず、声まで耳にすることになる。ここに使われた二つの修飾語――「誠意ある」と「動揺した」――以外では、これほどの効果を上げることはできなかっただろう。ロンドンの下町文化と、未熟な上品さを備えた、みすぼらしくいかがわしい弁護士が、器量に不相応の大きな仕事を扱っている様子が紹介されるときは、彼は「ひっこみ思案のでしゃばりとでもいったような」態度を見せていた、となっている。読者は――読者が物書きでなければ特に――この言葉遣いについて、べつにどうということはないと思うかもしれない。しかし、これを「たじろぐ自尊心」とか「怖じけづいた尊大さ」とか言い換えても差支えなかっただろうなどと考えるようでは、著作ということがぜんぜん理解できていないし、たぶん読書ということもあまりわかっていない。（「6」105頁）

おそらく中島は、同じスティーヴンソンを主人公に据えた「光と風と夢」執筆時にチェスタトンの『Robert Louis Stevenson』を参看し、その繙読が「山月記」の「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という表現を生み出すことに繋がったのではないだろうか。原書では、むしろ否定的な意味合いで挙げられた表現「flinching pride」（「たじろぐ自尊心」）と「quailing arrogance」（「怖じけづいた尊大さ」）を参考にして、中島は「山月記」の「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という逆説的言辞からなる表現の組み合わせを創案したと思われる。たしかにチェスタトンは、「ふたつの言葉の変わった組み合わせ」（「6」100頁）にスティーヴンソンの文体の特質を見出しており、すで

に『Orthodoxy』においても「人間を正気に保つものはいったい何か」という問いの「回答」に、こうした発想を重視する姿勢が示されていた。

> 現実の人間の歴史を通じて、人間を正気に保ってきたものは何であるのか。神秘主義なのである。心に神秘を持っているかぎり、人間は健康であることができる。神秘を破壊する時、すなわち狂気が創られる。〔中略〕かりに真実が二つ存在し、お互いに矛盾するように思えた場合でも、矛盾もひっくるめて二つの真実をそのまま受け入れてきたのである。〔中略〕二つのちがった物の姿が同時に見えていて、それでそれだけよけいに物がよく見えるのだ。こうして彼は、運命というものがあると信じながら、同時に自由意思というものもあることを信じてきたのである。〔中略〕このように、一見矛盾するものを互いに釣り合わしてきたからこそ、健康な人間は晴れ晴れと世を送ることができたのである。〔中略〕つまり、人間は、理解しえないものの力を借りることで、はじめてあらゆるものを理解することができるのだ。(「2」39 ～ 40頁)

以上から、中島はチェスタトンの逆説的な発想による説明の方法から直に示唆を得て、それを「狼疾記」と「山月記」の表現に活かした可能性が指摘できよう。ただし、『Robert Louis Stevenson』の一節は、ともに「自尊心」「尊大さ」という同義的な名詞を形容したものであるため、一方で「羞恥心」をもあわせて対に形容した中島の表現とは異なっている点は留意すべきである。「山月記」の「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という新たな対句的表現の組み合わせにこそ、中島の独創性があったのではないだろうか。

ともあれチェスタトンは、こうした「選び抜かれた鋭い表現」とその「組み合わせ」に「スティーヴンソンの文体の鮮やかなしるし」をみてとった上で(「6」108頁)、その表現追究の試みについて、次のように意義づけている(VII. EXPERIMENT AND RANGE, p.180)。

> スティーヴンソンは圧縮することに情熱をもっていた。あれほど多くを

生み出しながら、言葉少なな人間になりたいという奇妙な野望を抱いていた。言葉については結合してそれがまた圧縮でもあることをつねに求めていたように見える――組み合わされたとたん、自分がほんとうに伝えたかった第三の意味を新たに生み出してくれるようなふたつの単語を探し求めていたように見える。（「７章　スティーヴンソンの試みと幅」127 ～ 128頁）

中島はスティーヴンソンの文体にも強い関心をもち、彼を主人公とする「光と風と夢」を構想・執筆する過程で、チェスタトンの著作にみえる逆説的な言葉の「組み合わせ」を自らの文体に取り入れ、「狼疾記」や「山月記」の世界に活かしていたと思われる。そこには中島文学に与えたチェスタトンの影響の大きさが表れている。「狼疾記」で「楽天的」とした評言の背後には、中島の韜晦したチェスタトン受容のありようが指摘できるのである。

３．〈古譚〉への影響（２）――「木乃伊」

引き続き、中島作品におけるチェスタトンの影響について検討していく。古代エジプトを舞台に、戦争で侵入したペルシャ軍の武将・パリスカスの運命を描いた「木乃伊」には、チェスタトンの選集『Stories, Essays, & Poems』に収められた小説「The Curse of the Golden Cross (From *The Incredulity of Father Brown*)[13]」（邦題は「金の十字架の呪い」などで知られる）の内容を参考に描かれた場面がある。それぞれ時代背景や細部の設定こそ異なるものの、とくにミイラと対面する場面によく似た描写があるなど、注目すべき点が多い（原文では、考古学者の「スメール教授」らが墓所へ向かう途中で、謎めいた「嘲罵」や「わからない言葉」を耳にする場面[14]以降に明らかである）。「木乃伊」執筆に際して、中島はチェスタトンの「The Curse of the Golden Cross」を参看していたのではないだろうか。以下に、それぞれのミイラ（「平凡な木乃伊」／「幾年ともなく保存された」「死人」）との対面に至る場面を挙げて比較してみたい。

捜索を始めてから何日目かの或る午後、パリスカスは、たつた一人で、或る非常に古さうな地下の墓室の中に立つてゐた。何時、同僚や部下と、はぐれて了つたものか、この墓は市(まち)のどの方角に当るものか、それらは、まるで判らない。とにかく、何時もの夢想から醒めて、ひよいと気が付いて見たら、たつた一人で古い墓室の薄暗がりの中にゐた、といふより外はない。／眼が暗さに慣れるにつれ、中に散乱した彫像、器具の類や、周囲の浮彫、壁画などが、ぼうつと眼前に浮上つて来た。棺は蓋を取られたまゝ投出され、埴輪人形(ウシヤブチ)の首が二つ三つ、傍にころがつてゐる。既に他の波斯兵の掠奪にあつた後であることは、一見して明らかである。古い埃のにほひが冷たく鼻を襲ふ。闇の奥から、大きな鷹頭神の立像が、硬い表情でこちらを覗いてゐる。近くの壁画を見れば、豺や鰐や青鷺などの奇怪な動物の頭をつけた神々の憂鬱な行列である。顔も胴もない巨(おほ)きな眼(ウチヤト)が一つ、細長い足と手とを生(は)やして、其の行列に加はつてゐる。(「木乃伊」)

この「木乃伊」の場面は、次の原文の描写――奇怪な生きものの姿に擬せられるかのような装飾が施された地下の「墳墓」の様子（pp.81-82）と多くの共通点がある。

彼等は円いアーチの会堂のやうな円い小室に出て来た。何故なら其会堂はゴシック式の尖端のとがつたアーチが矢尻のやうに吾々の文明をつきさす前に建てられたものであるから、柱と柱の間の青白い一條の光りが頭上の世界への他の出入口を示した。そして又海の下に居るといふ漠然たる感じを与へた。／ノルマン風の犬歯状の模様が、巨大な鯊の口に似たある感じを与へて、底知れぬ暗さの中に、アーチ中にかすかに残つてゐた。そして石の蓋が明いてゐて、墳墓それ自身の暗い巨体の中にかゝる大海獣のあごがあるかもしれなかつた。（「金の十字架の呪ひ」290～291頁）

とくに両作品に描かれた暗い「墓室」「墳墓」に置かれた「蓋」の開いた石の「棺」や、その周囲が浮かび上がってくる叙述からは、中島が「木乃伊」執筆の際に原文の設定（pp.81－82）を参考にした可能性が指摘できるように思う。とくにパリスカスがミイラと対面する場面を挙げて、引き続き原文と比べてみたい。

彼は、その儘、行過ぎようとして、ふと其の木乃伊の顔を見た。途端に、冷熱いづれともつかぬものが、彼の脊筋を走つた。木乃伊の顔に注いだ視線を、最早外（そ）らすことが出来なくなつた。彼は、磁石に吸寄せられたやうに、凝乎（じつ）と身動きもせず、その顔に見入つた。／どれ程の長い間、彼は其処に、さうしてゐたらう。（「木乃伊」）

凡ての眼は、ある神秘な西方の方法に依つて幾年ともなく保存された、其死人の顔に注がれた。教授は驚異の叫びをおさへる事が殆ど出来なかつた。何故なら、其顔は蠟燭の面のやうに青白くはあつたけれども、今眼を閉じたばかりの眠つてる人のやうに見えたから。〔中略〕／牧師が呪ひの物語りをして以来、スメール教授の大きな額は反省の深い皺がきざまれた。（「金の十字架の呪ひ」291 ～ 292頁）

All eyes went first to the face of the dead, preserved across all those ages in the lines of life by some secret Eastern process, it was said, inherited from heathen antiquity and unknown to the simple graveyards of our own island. The Professor could hardly repress an exclamation of wonder; for, though the face was as pale as a mask of wax, it looked otherwise like a sleeping man who had but that moment closed his eyes. The face was of the ascetic, perhaps even the fanatical type, with a high framework of bones; the figure was clad in a golden cope and gorgeous vestments, and high up on the breast, at the base of the throat, glittered the famous gold cross upon a short gold chain, or rather necklace. The stone coffin had been opened by lifting the lid of it at the head and propping it aloft upon two strong wooden shafts or poles, hitched above under the edge of the upper slab and wedged below into the corners of the coffin behind the head of the corpse. Less could therefore be seen of the feet or the lower part of the figure, but the candlelight shone full on the face; and in contrast with its tones of dead ivory the cross of gold seemed to stir and sparkle like a fire.

Professor Smaill's big forehead had carried a big furrow of reflection, or possibly of worry, ever since the clergyman had told the story of the curse. But feminine intuition, not untouched by feminine hysteria, under-

図２　The Curse of the Golden Cross, p.82

この一節の末尾に関して、原文には「ever since」とあることから（図２参照）、「どれ程の長い間」との「木乃伊」の表現は原文を反映したものと思われる。なお新訳でも「思いに沈んだのか、心を悩ませているのか、その大きな額に一筋の皺（しわ）をいつまでも浮かべていた[15]」（「金の十字架の呪い」）とあることから、中島は蔵書の原文を直接参照していた可能性が高いといえるのではないだろうか。

この直後に「木乃伊」のパリスカスは、次の通り自身の身体に著しい「変化」が生じるのを自覚する。「その間に、彼の中に非常な変化が起つたやうな気がした。彼の身体を作上げてゐる、あらゆる元素どもが、彼の皮膚の下で、物凄く（丁度、後世の化学者が、試験管の中で試みる実験のやうに）泡立ち、煮えかへり、其の沸騰が暫くして静まつた後は、すつかり以前（もと）の性質と変つて了つたやうに思はれた。／彼は大変やすらかな気持になつた」（「木乃伊」）。

すでに指摘[16]がある通り、「沸騰」という表現は、中島も英書を所持していたスティーヴンソンの『ジーキル博士とハイド氏』の中で、ハイド氏が「メートルグラス」の薬を飲み干しジーキルへ変身する際に「かれの体が膨（ふく）れあがって来るように見える」とした描写（「ラニョン博士の手記」83頁）に基づくものである[17]。その「コップ」の薬を飲み干した後に「苦痛」から脱して、「言いようのない清新な感じ」がもたらされた場面の心理描写（「本件に関するヘンリー・ジーキルの詳細な陳述書」88頁）との関連が窺われる場面を、参考までに挙げておく。

> 肉を引き裂くような激痛が起こった。骨々の砕けるような痛み、死ぬほどの嘔気（はきけ）、生まれでる刹那（せつな）、断末魔の刹那の恐怖にも劣らぬ精神の恐怖。やがて苦痛はたちまちうすらぎ、わたしは正気づいたが、あたかも大患からやっと生きかえった心地であった。その感覚は一種異様な、一種言いようのない清新な感じで、その清新さのために信じがたいほど甘美な感じでもあった。（『ジーキル博士とハイド氏』88頁）

さらに、「木乃伊」にてパリスカスがエジプトに入国して以来「気になつて仕方のなかつたこと」、すなわち自らとミイラとの関係が「はつきり判る」場面の前後も、チェスタトンの「The Curse of the Golden Cross」(p.82)との関連が指摘できる（前掲図２参照)。パリスカスが「俺は、もと、此の木乃伊だつたんだよ」と口にするや「木乃伊が、心持、唇の隅(すみ)をゆがめたやうに思はれた」とある場面はその一つである。「何処から光が落ちて来るのか、木乃伊の顔の所だけ仄明るく浮上つてゐて、はつきり見えるのである」（「木乃伊」）と。

> それで足と体の下の方はよく見られなかつた。けれども蠟燭の光りは顔一つぱいに照らした、〔下略〕（「金の十字架の呪ひ」292頁）

原文では、スメール教授は「幾年ともなく保存された」眼前の「死人」の喉元にある「黄金の十字架」に触れた途端に、閉じた棺の石の蓋に頭をはじかれて「棺桶の側に人事不省にたほれた」とある。その後「ブラウン神父」の介抱もあって生還した教授は、「木乃伊」におけるパリスカスの「遠い過去の世の記憶が、一(いち)どきに蘇つて来た」という様子と同じく「せきを切ったように、人には言いにくい珍しいことをしゃべりまくった[18]」と描かれる。言うまでもなく、こうした〈変貌〉を遂げた人物の描写には、先の〈変身〉後のジーキルの告白の場面も自ずと想起されよう。

加えて、次の原文の描写は「木乃伊」の「合せ鏡」の場面ともよく似ていることに注目したい（なお同様の場面は、この時期に書き継がれていた未完の長篇「北方行」にも登場する)。以降は、原文のニュアンスをより伝えている新訳から引用する。

> 教授の見た夢は、専門の研究対象であるたくましいがこわばった古代芸術にも似て、不鮮明な線画というよりは骨太で巨大な模様と言うべきものだった。四角あるいは三角の後光をせおった見慣れぬ聖者、高々と突きでた金冠をいただき、光輪をめぐらした平たい顔、東方産の鷲(わし)、女の

ように頭髪を結んで顎鬚を生やした男、そのそそり立つような頭飾り。そういったもののなかでたった一つ、ずっと単純ですっきりしたものの形が教授の空想をほしいままにする記憶のうちに絶えずよみがえっていた。こういったビザンチンふうの模様は薄れた金地の上の炎のように刻みつけられているのだが、それは幾度も幾度も、その金のように薄れては消えてゆく……あとにはなにも残らない。（「金の十字架の呪い」196～197頁）

スメール教授が語った自身の「夢」の「記憶」は、さまざまな「模様」や「形」となり、それらは「幾度も幾度も」「薄れては消えて」いったという。同様に「木乃伊」のパリスカスも、過去のミイラの姿にかつての自らの姿を見出し、「彼はぞつとした。一体どうしたことだ。この恐ろしい一致は」と驚く場面がある。「合せ鏡のやうに、無限に内に畳まれて行く不気味な記憶の連続が、無限に――目くるめくばかり無限に続いてゐるのではないか？」と。とりわけ、次に引く描写は、原文の表現と明らかに類似しているのではないだろうか。

不思議なことに、名前は、何一つ、人の名も所の名も物の名も、全然憶出せない。名の無い形と色と匂と動作とが、距離や時間の観念の奇妙に倒錯した異常な静けさの中で、彼の前に忽ち現れ、忽ち消えて行く。（「木乃伊」）

こうした「木乃伊」での「距離や時間の観念の奇妙に倒錯した異常な静けさ」の中で繰り返される「記憶」の連環は、次の原文での墓所内の石の回廊における出来事（p.73）も踏まえられていたと思われる。

石の通路を歩いている人なら誰でも、足音のまぼろしに追いかけられるのがどんな気持ちか知っているでしょう。ぱたぱたと、あるいはとんとんと、こだまが前からも後ろからも迫ってくる。一人きりなのに、どうしてもほかに誰かいるとしか思われない。そういうこだまにもわたし

は慣れていたので、それまでずいぶん長いあいだ気に留めずにいたのですが、さっきお話しした岩に描きなぐられた図形を見て立ちどまったときです。わたしは心臓がとまったような気がしました。わたしは足をとめたのに、こだまは歩みつづけているではありませんか。(「金の十字架の呪い」167頁)

ここでの「岩に描きなぐられた図形」とは「魚」の文様であるが、次の「木乃伊」の一節との関連に明らかなように、中島はこれら原文の設定と表現(p.73)を参考に「木乃伊」を構想・執筆していたのではないか。

奇怪な神秘の顕現に慄然としながら、今、彼の魂は、北国の冬の湖の氷のやうに極度に澄明に、極度に張りつめてゐる。それは尚も、埋没した前世の記憶の底を凝視し続ける。其処には、深海の闇に自ら光を放つ盲魚共のやうに、彼の過去の世の経験の数々が音もなく眠つてゐるのである。(「木乃伊」)

地下の廊下に沿って無限に伸びる露出した岩膚(いわはだ)を見あげると、そこに輪郭こそ粗雑だが、それだけにまぎれもない魚の形が刻まれているのが見えたことでした。／じっと見ていると、どこかそれは凍った海に永久に閉じこめられた魚か、なにか原初の有機体の化石に見えてきました。(「金の十字架の呪い」167頁)

原文では「魚」の絵や形に「初期のキリスト教徒たち」の姿が見出された一方で、「木乃伊」では「盲魚」のような「過去の世の経験の数々」や「奇怪な前世の己の姿」が浮かび上がる。原文でブラウン神父が「わたしどもにはわからないことが出てくる超自然の物語を信じるほうが、わたしどもの知っているところと矛盾(むじゅん)するような自然の話を信じるよりも、実のところ自然なのです」(「金の十字架の呪い」188頁)と語った言葉は、「木乃伊」をはじめ〈古譚〉諸篇の世界(「山月記」の「超自然の怪異」など)を理解する

上でも重要であると思われる。中島がチェスタトンの『Orthodoxy』から抜粋した英文の一節（「ノート第11」）、すなわちチェスタトンが現世とキリスト教の教義伝統との関係性について感得した経験を自ら「思わずゾッとした[19]」と振り返り、信仰的に開眼するに至った〈告白〉の場面の内容とも通底しているのではないか。

以上から、中島は「木乃伊」を執筆する過程でチェスタトンの「The Curse of the Golden Cross」を参照していた可能性は高いと思われる。あわせて〈過去帳〉〈古譚〉執筆時の中島には、チェスタトンを通じて「神とか、超自然とか、さうしたものの存在」（「狼疾記」）や「超自然の物語」、すなわち「a preternatural story」（p.88、図３参照）とキリスト教への強い関心があったことも付け加えておきたい。

'It 's what I call common sense, properly understood,' replied Father Brown. 'It really is more natural to believe a preternatural story, that deals with things we don't understand, than a natural story that contradicts things we do understand. Tell me that the great Mr.

図３　The Curse of the Golden Cross, p.88

４．〈南洋もの〉への展開――「寂しい島」

中島の南洋行後の作品「寂しい島[20]」には、チェスタトンの運命観や自然観、宇宙観に影響を受けたと思われる一節が複数ある。太平洋の一孤島に滞在している「私」は、ある夕ぐれの渚で、自分の周囲の砂浜を逃げ走る無数の「小さな蟹」の群れに遭遇し、その自らの動きと連動して繰り返される「陽炎」のような姿に目を奪われる。人口の減少に見舞われた島で、このまま住民が息絶えて無人となった世界を「淡い影のやうな蟹」が領し、「灰白色の揺動く幻」だけになる日を思い、「妙にうそ寒い気持がして来た」と述懐する場面である。

> 潮の退いたあとの湿つた砂を踏んで行く中に、先刻から私の前後左右を頻りに陽炎のやうな・或ひは影のやうなものがチラ〳〵走つてゐること

に気が付いた。蟹なのである。〔中略〕初めてパラオ本島のガラルド海岸で之を見た時、一つ一つの蟹の形は見えずに、唯、自分の周囲の砂がチラ〳〵チラ〳〵と崩れ流れて走るやうな気がして、幻でも見てゐるやうな錯覚に囚へられたものであつた。今此の島でそれを二度目に見るのである。私が立停つて暫くじつとしてゐると、蟹共の逃走も止む。素速く走る灰色の幻も、フツと消えるのである。(「寂しい島」)

その後「汽船」に戻った「私」は甲板に出て空を仰ぐと、「南国の星座が美しく燃えてゐた」と述べ、以下のように結んでいる。チェスタトンの『Orthodoxy』にも、これらの「寂しい島」の場面と酷似した一節がある。

我々を取巻く天体の無数の星共は常に巨大な音響――それも、調和的な宇宙の構成にふさはしい極めて調和的な壮大な諧音――を立てて廻転しつゝあるのだが、地上の我々は太初よりそれに慣れ、それの聞えない世界は経験できないので、竟に其の妙なる宇宙の大合唱を意識しないでゐるのだ、と。先刻夕方の浜辺で島民共の死絶えた後の此の島を思ひ画いたやうに、今、私は、人類の絶えて了つたあとの・誰も見る者も無い・暗い天体の整然たる運転を――ピタゴラスの云ふ・巨大な音響を発しつつ廻転する無数の球体共の様子を想像して見た。／何か、荒々しい悲しみに似たものが、ふつと、心の底から湧上つて来るやうであつた。(「寂しい島」)

物が反復するということ自体は、物を合理的に説明してくれるどころか、むしろ物が何か空恐ろしいものに思えてくるばかりだった。〔中略〕自然界の反復というものが、私には深い感動に満ちた反復と感じられることがよくあった。〔中略〕野の草は、いっせいに指を振って私に何かしら合図しているように見えた。群がる星は、一心に何かを語りかけているように思われた。太陽は、何千回でも昇って来るのをよく見ていてくれと私に求めているような感じであった。宇宙全体が、同じことを何度

も何度も繰り返している有様は、次第次第に私の胸に力強く迫ってきて、ついには気も狂わんばかりに圧倒的な呪文のリズムへと高まり、そして私は、その叫び声のうちについに一つの観念を聞き取ったのである。(「4」97～98頁)

上掲の『Orthodoxy』の引用部に続く箇所は、実際に中島によって英文が抜粋されていることから(「ノート第11」)、中島がこの一節を読んでいた可能性はきわめて高い。中島はチェスタトンの「さまざまの物が反復を繰り返すという、ただその事実だけが唯一の根拠」(「4」97頁)とする発想に原書で触れ、そこにピタゴラスの例も引き入れることで、より「宇宙」「天体」の大きさに対比された「人類」の運命のはかなさや存在の卑小さを強調し、そこに「荒々しい悲しみ」のようなものを見出している。こうしたチェスタトンの認識に基づく新たな表現は、〈南洋行〉前後の自らの文学の行く末をめぐる中島の模索と試行の軌跡[21]でもあったのではないだろうか。中島文学におけるチェスタトンの受容のありようが、ここにも示されているように思われる。

おわりに

以上でみてきたように、中島敦の文学におけるチェスタトンの影響はきわめて大きいといえよう。中島は『Orthodoxy』『Stories, Essays, & Poems』を原書で読んだことはおそらく間違いない。とりわけ〈過去帳〉〈古譚〉の構想・執筆時期にチェスタトンの著作を通じて、小説の舞台はもとより、その人間観や世界観に触れていた可能性が指摘できるのである。「狼疾記」での「楽天的」との評価からは、むしろ中島の屈折した心裡が窺われ、それだけチェスタトンの思想と表現から強い影響を受けていたことの証左ではなかったか。中島にもたらされたチェスタトンの影響は、少なくとも南洋行後の短篇「幸福」執筆時にまで及んでおり、その受容の様相からは文壇登場前後の５年にわたる文学的苦悩が強く伝わってくるのである。

また〈古譚〉諸篇に共通する結末として、すべてが「死」や「狂」といった「取り返しのつかぬ[22]」結果で終わることは、中島作品へのチェスタトンの影響の最たる証であろう。同時期に構想・執筆された中島文学に及んでいた影響感化の強さを示すとともに、それは当時の中島文学の基底でもあったのである。「山月記」においては評伝『Robert Louis Stevenson』からの影響も指摘でき（おそらく「狐憑」の詩人シャクの造型とも関連していよう）、また「文字禍」の世界はどこか「ブラウン神父」の語る文明観や歴史観とも通じている。

チェスタトンとの関わりは、中島文学の特質を見極める上でも欠かせない視点であり、新たな中島文学像の探究に繋がっていくテーマでもある。南洋行前後の作品の成立時期を特定する上でも、さらに詳しい分析が求められる。個々の作品解釈には至らなかったが、別稿を期したい。

付記

中島敦の文章の底本は、『中島敦全集』全３巻（筑摩書房、2001年10月、2001年12月、2002年２月）とし、引用は全てこれに拠った。引用の際は、原則としてルビ・傍点・旧仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字へ改めた。

---

① G.K.Chesterton, *Orthodoxy* (New York: Dodd, Mead & Company, 1908). ここでの引用は1924年の版に拠った。なお、本書の訳文には安西徹雄氏の訳を引用し、参照させていただいた（G.K.チェスタトン著／安西徹雄訳『正統とは何か』〈新版〉春秋社、2019年4月）。

② 拙稿「中島敦のG・K・チェスタトン受容―「山月記」「幸福」と『Orthodoxy』との比較から」（『別府大学紀要』第63号、2022年2月）参照。

③「かめれおん日記」「狼疾記」とあわせて、単行本『南島譚』（今日の問題社、1942年11月）収録時に付された総題名。以下、この総題を示す場合は〈過去帳〉と表記した。

④「狐憑」「木乃伊」「山月記」「文字禍」とともに、単行本『光と風と夢』（筑摩書房、1942年7月）収録時に付された総題名。以下、この総題を示す場合は〈古譚〉と表記した。

⑤『中島敦文庫目録（日本大学法学部所蔵）』（日本大学法学部図書館、1980年11月）。

⑥ G.K.Chesterton, *Stories, Essays, & Poems*. Everyman's Library, No.913 (London: J.M.Dent & Sons, 1935). なお、引用は初版に拠った。

⑦「寄せ集め文集、雑録」（ちくま文庫版『中島敦全集１』筑摩書房、1993年1月、399頁）の意。

⑧ 中島と澤村との関わりについては、橋本忠広「中島敦における英文学受容―澤村寅二郎氏の存在とハックスレイ『対位法』」（『日本文学』第45巻8号、1996年8月、59～69頁）に詳しい。

⑨ 田鍋幸信「中島敦 蔵書目録」（日本文学研究資料刊行会編『梶井基次郎・中島敦』〈日本文学研究資料叢書〉所収、有精堂出版、1978年2月）276頁。

⑩ 註⑧の橋本氏論文。65頁。

⑪「語注」（筑摩書房版第3次『中島敦全集１』所収）561頁。

⑫ G.K.Chesterton, *Robert Louis Stevenson* (London: Hodder and Stoughton, n.d.). 引用および図版はすべて1927年刊の初版に拠った。なお、本書の訳文には別宮貞徳・柴田裕之両氏の訳を引用し、参照させていただいた（ロバート・ルイス・スティーヴンソン／別宮貞徳・柴田裕之訳『G・K・チェスタトン著作集〈評伝篇〉5　ロバート・ルイス・スティーヴンソン』所収、春秋社、1991年11月）。

⑬ 以下、原文とある場合は本作を指す。なお訳文には、断りのない限り「金の十字架の呪ひ」（チエスタートン作／直木三十五訳『ブラウン奇譚』〈世界探偵小説全集〉第9巻所収、平凡社、1930年3月）を引用した（総ルビは省いた）。

⑭ 註⑬に同じ。290頁。

⑮ 中村保男氏の訳を引用し、参照させていただいた（「金の十字架の呪い」、G・K・チェスタトン／中村保男訳『ブラウン神父の不信』〈創元推理文

庫〉所収、東京創元社、2017年5月、新版）180頁。以下、新訳とある場合は本書の訳を指す。

⑯ 佐々木充「中島敦「木乃伊」の特質について」（『千葉大学教育学部研究紀要』第24巻第1部、1975年12月、175頁）などに指摘がある。

⑰ ここでの引用は、田中西二郎氏の訳（スティーヴンソン／田中西二郎訳『ジーキル博士とハイド氏』〈新潮文庫〉、新潮社、1967年2月）に拠った。

⑱ 註⑮に同じ。196頁。

⑲ 前掲『正統とは何か』（「5　世界の旗」）137頁。

⑳〈環礁―ミクロネシヤ巡島記抄―〉の総題の下に『南島譚』（前出）に収録された。

㉑ 拙著『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』（おうふう、2016年9月）参照。

㉒ 前掲『正統とは何か』（「7　永遠の革命」）223頁。